教区新報

第12号

発行
浄土真宗本願寺派
兵庫教区教務所

〒650
神戸市中央区下山手通8丁目
1番1号　本願寺神戸別院内
電話（078）341—5949

出会い

私達僧侶はより多くの人々と出会うことのできる身を恵まれている。そうした内には、生涯忘れることのできないような出会いもまれにあるものだ。

もう十年余りも前になろうか？F市のあるお寺に布教に寄せていただいた時のことである。挨拶にみえたご住職は、大変申し訳なさそうに「折角はじめての御縁を頂戴致しましたのに、御覧の通り近かに市会議員選挙があり、今日は事務所開きの日でしてきっとお参りが少ないと思います。それに、私自身も春まで勤めていましたので、何かと行き届かぬことお許し下さい」といわれた。

所が出座して驚いた。挨拶とは違い大変多くのお参りなのだ。しかもそのお聴聞の姿勢は平生のお育ての程が知られるもので、頭の下がる思いがした。

法耕ということをきくが、一朝一夕に成せることでもないので、住職にこのことを話してみると、先代住職が随分ご苦労なさったことが分った。

先代住職という方は、七十才頃まで布教のために近畿一円を旅された人で、この方を知る人は多い。晩年、健康を害されてからは、御門徒の人々に「これからは外へ説教に出ることはしないで、残された人生皆と一緒に仏法聞こう」と宣言されたそうだ。今日の御法義繁昌の出発点は、この時だった。

この時の住職のことばは「まず年を取った者が寺へ！」だったそうである。こうして寺へ参った年配の人々が各家庭に帰って、「御院さんにしかられるで、頼むから寺へ参ってくれと」若い人へ伝えたそうです。この住職は五年余の活動の後、浄土へ帰って行かれたのである。わずか五年、もし義理であったならこのような繁昌はないと思い聞いて行く内に、住職が先頭になっての徹底したお聴聞がされて来たことがあったのだった。例えば二日間の法要があるとしよう。一日目はお招きした講師の法話を、文字通り住職が先頭にたって、一番前で常に聴聞されたという。そして二日目——ご自身の前日の法話の領解をお話しされたのである。

この出会いは、住職として、又、一布教使なるが故に忘れ得ぬ、心に残る所のことを与えてくれるものだった。こうしてみると出会いのよろこびは、求めずして与えられるようなものとも思われる。我々の日常生活の中にある出会いをみても、この通りである。これが宗祖と法然上人との出会いにおいては、誠に重大な意味を持っていたと知らされる。

智慧光のちからより
本師源空あらわれて
浄土真宗ひらきつつ
選択本願のべたもお

と法然上人を讃えられた和讃がある。これによると、宗祖は源空上人が如来の化身として本願を明らかにするために現れたお方だったと仰がれている。宗祖御自身を成就せしめたのは、如来のおつかいとしてのこのお方だったというのである。

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおおせをこうむりて
信ずるよりほかに別の子細なきなり

の文には、宗祖の法然上人を思慕する心情が余すところなくあらわされている。このことばはおそらくは、宗祖が法然上人とお出会いになって以後、御往生の時に至るまで片時も脳裏をはなれなかったことであろう。

一つの出会いが、かくも大きな意味を持っていることを知らされる時、私達も又、素晴しい出会いを願うものである。

城崎組　清蓮寺　應供乗生

御同朋の社会をめざして ⑫

出石組正福寺　山崎一朗

『さあ、お腹の中までは判らんけどなんやなこの「意見具申」ちゅうのは前の「答申」にくらべると、部落問題をなんとしてでも解決せにゃならんちゅう意気込みが感じられんことは確かやな』

『困ったことなりましたな』

『でもこれなにも今に始まったことやあれへんで、部落が自主的な解放運動を起こすと国がこれを上から抑える、いや包み込むちゅうのかそういうやりかたは今まで何回かあったで。明治がそうやろ、自由民権運動の中から部落の人間が立ち上がりかけると、お上は同情融和大会でなもの作って取り込もうとする、全国水平社がこれをはねつけると中央融和事業協会を作って部落から水平社の影響力を殺ごうとする、あげくのはてが今度の戦争で国家体制の中で「人権」そのものが吹き飛んでしまう、やっと敗戦の中から戦後の部落解放運動が立ち直って今日まで四十年、それも昭和五十年を折れ目に二つの特措法で処理されて今度の「意見具申」でいよいよ国の側が部落の自主的な運動を潰しにかかってきた、歴史の上からみるとこれで三度目やな』

『また、歴史ですかいな』

『またちゅうことがあるか、あのな、歴史いうとすぐ昔のことと馬鹿にするけど、人間の今したり思ったりしてることはたいてい昔でもしたり思ったりしてるんや。そのときその結果がどうなったかを教えてくれるのが歴史やねん。そんならいま自分のしていることがどうなるかの見当ぐらいつくはずやで、運動でも同じこっちゃ』

『そうすると「解放基本法」の制定なんてのは大変なことですな』

『そうよ、糾弾否定、部落解放運動破壊、国家中心的同和行政編成という国の行きかたのなかに要求していくんやからな』

『そういえば本願寺さん近ごろあんまり「基本法」のこと言いまへんな。近いうちに大きな事業か法事があるとかでその金集めに忙しいんと違いますか』

『阿呆なこと言いいな』

『冗談ですがな。それにしても一方で部落解放、一方では四〇〇回忌とか移転四〇〇年記念とか、これどう結びつきますんや』

『別に結ばんでもええがな。でもな、こんなことも考えられるな。そりゃたしかに顕如上人て方は偉い人やわな。織田信長なんて狂人が権力握った武将相手にしかけられた戦争を戦い抜いた方やからな。しかし、信長にしろ、本願寺に敷地くれた秀吉にしろ仏法なんてんで眼中にない奴らやで。己の欲の邪魔になるから攻め殺すか、己の欲の邪魔になるから物を与えて手なづけておくかの違いだけやろ。親鸞聖人を敬うわけでも、お念仏喜んだわけでもないわな。特に秀吉なんてのはなんやろ、強い方には土地をやり、物を与えて懐柔するが、弱い民衆には刀狩り、検地、身分統制令と締め上げた男やろ。近世身分差別社会の草分けは豊臣秀吉やろな。その男から寺建てる土地貰うたてことは身分差別社会の編成に一役請け負うたてことやな。いうなら屈辱の歴史の始まりてことやろ。

そういうことの恥ずかしさと懺悔の中からもう二度と私達はあんな恥ずかしい生き方はいたしませんと誓いあうのが寺基移転四〇〇年記念ちゅうことやろ。

それを秀吉さんから土地貰ろて、お寺を建てて四〇〇年、いやめでたいめでたいと喜んでいたらこれまぎれもない阿呆やで』

『ほんま。ところでご院さん、もう一遍聞きますけど浄土真宗なんで同朋運動を言いますんや』

『浄土真宗やからやろ』

『またおちょくって』

『そうやない。そりゃまあいろいろ意見あろうけど私なりに思うんやがな。

一つはやはり「十方衆生」とある本願のお心やな。「おまえ一人救われたらそれでええちゅうもんやないで」いうことやろな。

二つめは親鸞聖人という方の生き姿やな。そりゃ私ら親鸞聖人の生き姿のまねでけへんで、でけへんけど親鸞聖人が今おられたらどんな生き方なさるやろと思うことぐらいはできるわな。今日本におられたら、今本願寺におられたら、今、この寺の住職しておられたらどうされるやろうと考えてみ、脇の下から冷や汗出るで。聖人が部落差別にどう対処されるやろと考えてみ、同朋運動は当然の道やないか。

三つめは先刻言うた教団の歴史やろな。幕藩体制の中で身分差別の片棒をどう担いできたか、もっと言うなら私たちの先祖がこの教団の中でどんな目でみられて来たかちゅう歴史の懺悔よ。でもこれ話してると長うなるから今日は止めとこ』

『へえ、そんならこれで。ご院さん体無理しやはったらあきまへんで』

『ああ、おおきに。あんたも達者でな。さいなら』

（完）

門徒推進員

慶讃大法要を迎えて

教区新報の投稿、早くから順番がわかっていながら文章の下手な私は「何を書かせて頂いたらと」何時も頭の中で繰り返していましたが、先輩諸氏の書かれた記事を読ませてもらっていますと私が書きたいと思う事がすべて書かれてしまった様な気が致します。

推進員の活動と言えばもうお決まりの事ばかり、ごまかしでもいいから何かを書かなければと思って見ても十二号目となると何も書く事もありませんし作り事を書くわけにもゆきませんのでこの度は推進員の活動報告からはなれて大法要のお話しでも書かせて頂きます。氷上東組、私達の城通山明光寺は慶長年間の創立以来、私共の先祖によって三百余年の風雪の歴史を支え、ご法義を護持されてきた。このご先祖の願を享けてご相続する中で、この度四月二十九日、三十日の両日、宗祖親鸞聖人ご誕生八百年、立教開宗七五〇年、丹州十三日講の三大法要が勤修されました。

われわれ百八十三戸の門徒一同が、お念仏の声高らかに総力を結集して、この大法要をお迎えした事は、まことに意義深いものがありました。一年前より法要委員が結成され、各部門に於いて準備が進められてきました。

招待寺院六十カ寺、法要に花をそえるお稚子行列は若い母親が盛装しての付添いを含めて約二百五十人、このおねりの行列は誠に目を見はるものがありました。庭儀の会所十二戸、各寺院の宿舎と、おもてなしに誠心誠意をつくして準備をする中で、三十年に一回と云うこの歴史的事業のご勝縁の心を子や孫に伝える事が明光寺を護り支えて来られた我等のご先祖の御苦労に応え、ご恩に報ゆる事だと痛感致しました。

二十九日の逮夜、初夜、三十日の晨朝、日中御満座、十三日講と毎席数百名を越える一般参詣者、ご本山特派布教師、味府覚了先生のご法話を聴聞させていただき、御満座での六十人の寺院法中のまわりお経、十三日講の御消息披露と、始めての御法縁に遇う人も多く、感謝のお念仏で一ぱいでした。

この大法要を無事に終えて今思う事は、われら門徒一同、老いも若きも力を合わせてこの大事業をやりとげた事のすばらしさです。

そして御勝縁に遇せていただいたありがたさに感激の喜びを深くがみしめております。この感激を忘れる事なく御法義大切に相続していかねばと、肝に命じた事です。

合掌

氷上東組北和田明光寺　松下峯男

〜〜〜